

東高1年の歩み

11月30日、
修学旅行



例年の台湾研修の替わりに、国内各地に分散しての3泊4日の研修となりました。国内とはいえ、初めて訪れる土地からは多くのものを学び取ったようです。

2020年9月30日
体育大会



新型コロナウイルス禍で多くの行事が中止になる中、ようやく実施された行事が体育大会でした。無観客などの制限の中でしたが、一日精いっぱい楽しむことができました。

4月6日
入学式



新たに281人の新入生を迎えることになりました。まだ初らしい1年生ですが、早く東高に慣れて勉強に部活動に頑張ってください。

7月16日、
校内大会



5月28、29日
千南祭



光子カロケットとタイムマシン



静岡理工科大教授
(航空・宇宙工学)
増田 和三
(51回、1978年卒)

久しぶりに卒業アルバムを開いてみました。35HR寄せ書きに「光子カロケットをつくろう」「タイムマシンをつくろう」と相対性理論にかかれた高校生ふたりの将来の目標が並んでいます。それから32年後、光子カロケットではありましたが、一方の高校生が開

発に関わった無人輸送船が物資を届けるために国際宇宙ステーションに迎り着きました。29年間の宇宙開発に関わった宇宙機は3機種でした。最初は日本版無人スペースシャトル。必要性が説明しきれず、実現に至りませんでした。次は大気圏再突入技術確立のためのカプセル機。制御系を担当したその機体は種子島から打ち上げられ、設定した通りに地球一周、軌道離脱、大気圏再突入し、太平洋の真ん中に着水しました。3機種目が冒頭の無人輸送船。開発に14年。4号機まで製造、運用に関わって、定年退職となりました。最後の足掻きとして世代目の無人輸送船を提案し、開発が決定したところで、かの高校生の小学4年時に書いた「宇宙開発への関わりは終わりました。定年後はきっぱり別の事をやりたい」と思っていたところ、幸いにも6年前に県内大学の教員に採用していただきました。今も思っています。龍勢との出会いがその意気な気持ちと生活を一変してくれました。数百年前から伝承されてきた龍勢には工学的な知恵と文化的な魅力が溢れている

ます。工学的解明のために龍勢にカメラや計測装置を搭載し、データ取らせせていただきました。龍勢連の方々のお話は工学的に理に通っていることばかりです。龍勢の飛翔の仕組みを証するためには考えただけほどのミニ龍勢は藤枝市主催の小学生たちへの科学教室に繋がりました。昨年にはミニ龍勢製作・打ち上げも含め、科学技術と藤枝の文化をテーマに取り上げた「藤枝市少年少女発明クラブ」の活動に関わらせていただきました。そして、とうとう龍勢の里、朝比奈に住みつき、高校卒業以降空白となっていた故郷での暮らしを取り返そうとしている日々です。この故郷への復帰を乗り遅きものにしていただいたのは、明らかに高校同窓です。たわいもない相談の相手をしていたとき、さまざまな人を紹介していただいた。そして一緒に活動させていた。感じています。故郷・同窓の有難さをしみじみ感じます。

会報委員の10年

浅野新聞店代表取締役
浅野 達哉
(67回、1994年卒)



私は前職で新聞の編集者をしていて、縁で、2007年から10年ほど、東高同窓会の会報委員として、この同窓会報「千南原」制作のお手伝いをさせていただきました。紙面への貢献度は微々たるものであったと思いますが、会報委員を務めた期間は同窓会館に何度も足を運び、東高や同窓会の「今」を伝えるために取り組みました。同窓会報は10月に発行する年が多く、毎年春ごろから打ち合わせを重ねて制作していました。卒業生の情報を集めつつ、その年にふさわしいテーマや構成、寄稿をお願いする方の人選、紙面レイアウト、原稿の校正など決める事は多岐にわたりました。当時の三輪委員長、今回私に原稿の依頼をしてくださった、会報委員Kさんのリーダーシップやアイデアの下、作業はスムーズに、そして和やかに進んでいたと思います。私は主に紙面レイアウトを担当する中で、全体の原稿量を考えつつ、少しでも見栄えがする紙面、読みやすい紙面を目指したつもりです。試行錯誤は毎年のようにありましたが、何となく形になって安堵していたのを今でも覚えています。また、原稿の校正で「随想」を発行前に読めるのは、私にとって毎年の楽しみでもありました。ご活躍を見聞き

していた方が実は東高出身と知って驚くことが何度もありましたし、多彩な卒業生を抱える東高の懐の深さをもっと感じていました。ですので、まさか自分が原稿を書く側になるとは想像もしていませんでしたが、思い入れのある同窓会報ということもあり、僥倖ながらお引き受けした次第です。会報委員を務めていた当時、私は同窓会役員の中でも非常に若く、前職での仕事が内勤部門だったこともあり、同窓会の会合は外部の方々、しかも仕事で簡単に目にはかけられなかった。田へ戻って5年経ちましたが、この頃の経験がどれほどありがたかったかという思いは、現在の方が強いかもしれません。東高の創立100周年に向けた取り組みも、徐々に本格化していくことと思います。この同窓会報「千南原」が、東高と卒業生、卒業生同士をつなぐ役割を今後も果たしていってほしいと心から願っています。

ドイツの還暦大学生



甲斐 淳
(36回、1963年卒)

いつかドイツの大学生になってライフワークである失われた東方領土の研究を

するんだーこう思い始めたのはいつの頃からだったろうか。学費無料のため世界中から志願者が集まり難のDSH(入学のためのドイツ語試験、入学した外国人学生の7〜8割が中退していくという厳しい成績審査、若い人々と比べて40歳以上の年齢差というハンディ)そんな諸々の困難をすべて承知で、私が2005年高校の数学教師を定年退職すると同時に輪っ一つでドイツへ飛び出したのは、受験・恋愛すべてに挫折の連続だった自分の青春時代に対する一種の意図返しに気が持ったが言えな。2度目の挑戦で無事試験に合格し、1457年創立の由緒ある、歴史研究のメッカ・フライブルク大学の正規学生となる。主専攻はドイツ現代史。大学ではすべてドイツ人と同じことをやらなければならぬので大変だったが、彼らの2倍くらいの時間と努力をかけて、最後は意地で卒業するまでだった。ドイツ語は講義の聞き取りや、ゼミでのテンポの速い質疑応答の展開に最後まで苦しめられたが、読み書き、特に文章力には自信があったので、ゼミマスター(学期ごとの試験や毎学期の論文の作成には寝食忘れて没頭した。ドイツの学生はみな

本当によく勉強するが、私も成績では彼らに絶対負けなかった。・、勉強した。UB(大学図書館で何度徹夜をしたことか。ゼミではロシアやポーランドの旧ドイツ領(カリーニングラード、リビフ、ベルリン等)へも何度か踏査旅行をし、私もドイツ側学生団の一員として毎回、現地大との合同ゼミナールで研究発表を行った。夜はドイツの学生たちと毎晩のようちやうこカを片手に深夜まで話し込み、自分が今、60代半ばということなど、まるで忘れてしまっていた。卒業のテーマは「東プロシエン難民」すなわち手短かに言ってしまうと、大戦末期赤軍に包囲された東プロシエン住民200万の逃避行、要するに戦である。20世紀のExodusの出エジプト記とも言えるか。渡独してからいつか8年の歳月が流れていた。ドイツが再び遠くなって、すでに久しい。新型コロナウイルス禍の修羅の世にある今、あのドイツ時代を振り返ると悔いも、やりたことをみやうって何の悔いもない、苦しくも幸せな学生生活だったと思ふ。それはお金や地位は得られないう、大きな大きな人生の価値である。

マスクの下は笑顔で



藤枝市総務部長
横井美保子
(56回、1983年卒)

このたび、寄稿の機会をいただき感謝申し上げます。自由な校風の中で伸び伸びと過ごした高校時代、温かく見守ってくださった恩師、お世話になった先輩や同級生とのエピソードを懐かしく思い出します。明るく好奇心旺盛な友人達との日々は楽しく、思いやりの心や、困難に負けないポジティブ思考が身に付いた貴重な時間でした。

した。そして、2年まで在籍した演劇部では、部復活させた先輩方のエネルギーに大々刺激を受け、個性が光るメンバーとの活動で、多角的な視点やメンパでも楽しむ「遊び心」の大切さに触れた気がした。当時、現代国語の授業で、東高出身の郷土を代表する作家、小川国夫先生の小説を題材に、軽便鉄道が走っていた時代の藤枝について学び、その後文化講演会で先生の話を聞く機会に恵まれた。内容は難解でしたが、その思慮深い眼差しと佇まいが強烈に印象に残っています。卒業後も地元に戻らず、日没後の蓮華寺池公園を思索に耽りながら散歩されるの活動に時々お見かけし身近に感じるとともに、独特な作風が育まれる時間と空間を共有しているような誇らしい気分になったものです。池の畔の文学館には、ご遺族のご厚意により先生の書斎が再現され、故郷藤枝への深い思いが伝わってきます。先生の作品に描かれる蓮華寺池公園は年々進化を続け、市の整備や市民グループの活動により、今では四季折々の花が咲き誇る市民の憩いの場となり、県内外から年間130万人が訪れています。また、

4年前には、池の周囲2周余り3117メートルに市民の皆さんが育てた花を隙間なく並べるギネス世界記録達成し、市民を驚かすまで取り組む花のまちづくり「おじえだ花回廊」の拠点にもなっています。藤枝市の職員として行政に携わる自分にとって、東高時代の思い出はどれも貴重な経験として今に繋がっています。現在は、新型コロナウイルスの猛威で日々状況が変化中の中、県や医療関係者と連携し、ワクチン接種、感染防止対策、療養者の支援などに最優先で取り組んでいますが、アフターコロナの時代を見据え「住みでたい、住み続けたいまち」、また果つて若者には「将来戻って来たいふる里」的なまちづくりを進める歩みを止めてはいけないと考えています。先日散歩をしていたら、お寺の掲示板に「マスクの下は笑顔」という言葉を目にし、気持ちが明るくなりました。こんな時だからこそ、お客様と接するときに笑顔を示すことで、心に寄り添った対応をさせていただきます。そして、私は我慢の時ですが、皆が日々の生活で小さな幸せを感じ、「笑顔」を絶やさず暮らせるように、力を寄せていけたらと思います。

恩師を訪ねて

岐部 琢美 先生



〈1976年4月から1987年3月まで在職、38回、1965年卒〉

母校でもある「東高」に赴任したのは1976年4月。11年ぶりの里帰りだったそこで実感したのは「女子が多くなったこと」と「素直な生徒がそろっていること」の2点だった。自身の東高入学は62年4月。女子が在籍したのは7クラス中2クラスだけだったが、赴任してみると4クラスに倍増。さらに在籍していた当時、色濃く残っていたパンカラ気風は消え、「一を聞いて十を知る」といった生徒も多くなった。たいてい、十年ひと昔を身をもって感じること、二つの違いを実感したのだらうか。

武蔵野美大出身で、担当教科は美術。87年3月に転任するまで11年間、唯一の美術教師として教壇に立ってきた。指導するのは1年生だけ。それも音楽、書道との選択制のため、実際に接することができたのは学年の3分の1に過ぎない。クラス担任も経験なかった。生徒との関係は希薄になりがちになることがだが美術部の顧問を務め、部活動を通して深く生徒と関わり続けてきた。美術部顧問として、力をついたものの一つに校外展開催がある。部員たちは日ごろの成果を発揮すべく展示会を目標に制作活動に励み、自らの可能性を育んでいった。

令和2年度維持費(同窓会費)の卒業会別納入金額

維持費の納入金額が年々減少しています。下記内容を参照され卒業回別の横のつながりを強化していただき一人でも多くの方が会費納入にご協力くださるようお願い申し上げます。参考：30回(昭和32年卒) 40回(昭和42年卒) 50回(昭和52年卒) 60回(昭和62年卒) 70回(平成9年卒)

回	人数	金額	回	人数	金額	回	人数	金額	回	人数	金額	回	人数	金額
1回			20回	2	4,200	39回	83	372,400	58回	13	49,800	77回	4	8,800
2回			21回	7	31,200	40回	74	241,400	59回	18	54,600	78回	10	29,600
3回			22回	9	37,000	41回	44	144,000	60回	15	54,800	79回	8	21,600
4回			23回	8	25,000	42回	43	126,200	61回	15	50,800	80回	9	29,600
5回	1	6,200	24回	10	33,400	43回	21	70,400	62回	14	34,000	81回	7	21,200
6回			25回	8	28,800	44回	31	106,200	63回	6	15,000	82回	8	17,200
7回			26回	20	59,800	45回	31	106,000	64回	16	64,800	83回	7	37,000
8回			27回	25	78,600	46回	26	72,000	65回	7	29,400	84回	9	21,800
9回			28回	37	115,600	47回	39	127,400	66回	15	40,000	85回	8	19,400
10回			29回	36	148,200	48回	31	139,000	67回	16	40,600	86回	11	23,600
11回	1	4,000	30回	25	85,800	49回	24	89,400	68回	6	17,000	87回	9	21,600
12回	1	2,000	31回	33	120,800	50回	34	112,800	69回	12	34,000	88回	9	21,600
13回	2	8,200	32回	32	104,800	51回	30	80,600	70回	10	23,400	89回	10	21,400
14回			33回	43	166,200	52回	38	110,000	71回	3	10,400	90回	11	23,800
15回	1	4,200	34回	36	126,200	53回	18	55,000	72回	2	16,200	91回	5	11,000
16回	2	4,400	35回	44	146,600	54回	23	74,000	73回	3	10,400	92回	11	29,600
17回	1	2,200	36回	39	134,800	55回	18	57,000	74回	5	22,600	93回	18	67,800
18回	4	15,400	37回	27	69,200	56回	28	82,000	75回	2	8,400			
19回	1	4,200	38回	47	133,000	57回	20	55,400	76回	4	10,400	合計	1,494	4,934,400

令和3年3月

40年卒(42年卒業) よりの寄付
「70歳」ということで最後の同期会にしよう第4回目を平成31年3月に開催し、その時に余った「115,126円」を同窓会に寄付することに決定しました。4月に、事務局にお伺いし寄付をいたしました。有意義にお使い下さい。

実行委員会一同